

キャリア教育の視点に立った特別活動

Extracurricular Activities from the Perspective of Career Development

河田 悦子
KAWATA Etsuko
水田 聖一
MIZUTA Seiichi

はじめに

少子化が進み、子どもを取り巻く環境が急激に変化している中で、自立心と社会性を身に付けた児童生徒を育てることが、今重要な課題になっている。全人的な人間形成の場である学校教育の中でも、特別活動領域の果たす役割は、その特質を鑑みて大きなものがあると考えられる。さらに、「生きる力」の育成には、発達段階に応じて主体的に進路を選択する能力・態度を育てるキャリア教育の視点が必要であり、その視点から特別活動の現代的意義について考察を行う。

1 特別活動の特質と生きる力の育成

平成20年3月に改訂された小学校（中学校）新学習指導要領では、特別活動の目標は次のように示されている。

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。（人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。）」（ ）内は中学校。

改訂に当たっての基本理念は、現行の「『生きる力』をはぐくむ」という理念が引き継がれたものであり、特別活動の内容については、次のように述べられている。

- ・よりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成を特に重視し、それらにかかわる力を実践を通して高めるための体験活動や生活を改善する話し合い活動、多様な異年齢集団による活動を一層重視する。
- ・学級活動（ホームルーム活動）や児童会・生徒会活動、学校行事等について、それぞれの活動

を通して育てたい態度や能力を示す。

特別活動は、まさに基本理念の具現化に直接かかわる領域といえる。そこでまず、特別活動の特質と「生きる力」の関連について考察したい。

（１）集団活動による社会性の育成

教育指導の形態には集団と個人の二通りがあるが、特別活動は、集団場面を通して行われる。教科・道徳と異なり、特別活動は、どの内容においても集団活動そのものが学習内容であり、かつ学習方法でもある。

子どもたちは、学校生活においてさまざまな集団に所属することにより、その集団に対する所属感・連帯感を抱き、集団活動を通して、円滑な人間関係や成員相互の信頼感、所属集団の改善への姿勢や問題解決の方法等を学び取っていく。また、そうなるように教師の指導がなされなければならない。

（２）体験学習による人間形成

特別活動は、“なすことによって学ぶ”（learning by doing）そのものの活動である。合理化され、画一化された現代の消費生活の影響を受け、子どもたちは、自然の中で遊ぶ機会が少なくなり、結果として体験そのものが乏しくバーチャルな世界の占める割合が高くなっている。たくましく生きるための生活の知恵を身に付ける機会は、大人の側がよほど意識しないと得られなくなっている。従って、教育活動の中で、体験しながら学んでいく場面を意図的に設け、失敗を恐れずに多様な体験をさせることは、重要で急務な課題となっている。

体験的な諸活動を通して、子どもたちは、自らの意志で選択、決断しなければならない場面に出会うことができ、参加の喜び、完成の喜びを味わうこともできる。また、他に感謝する心、ものに感謝する心も育つと考えられる。

（３）生き方を学び、生きる力を培う特別活動

全人的な人間形成の場である学校で、今、子どもたちは生き生きとしているだろうか。朝のけだるい顔、ゲームに熱中しているときの目の輝きとは対照的に覇気のない表情、金銭感覚のルーズさ、コミュニケーション能力の乏しさ等、心配な様子が思い浮かんでくる。

「生きる」ということは、人間らしい生き方をすることであり、同時に、個性ある自分らしい生き方をすることでもある。大人自身がそのような生き方をすることが難しかったり、知識だけで達成が不可能だったりするが、だからこそなおのこと、「生きる力」を育てることが重要であり、生き方に結びつく特別活動領域の果たす役割は大きいものがある。

２ キャリア教育と特別活動

アメリカで提唱されたキャリア教育は、1970年代にすでにその理念が日本に伝えられていたが、平成11年12月の中央教育審議会（以後「中教審」とする）の答申「今後の初等中等教育と高等教育との接続の改善について」によって、実質的にスタートしているといえよう。

その後、いくつかの研究や報告等を経て、平成18年11月に「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引きー児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためにー」（以後「手引き」とする）が文部科学省から出された。この手引きにおいて、キャリア教育に関する内容が総合的に語られている。

キャリア教育について、平成11年の中教審答申では、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」としている。平成16年1月には、キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書が提出され、次のように定義されている。

「キャリア概念」に基づいて、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

平成18年の手引きでは、若者の様々な課題や各学校等での取り組み状況の現状に鑑み、後者の報告書の定義が使用されており、同様の理由から、ここでは、手引きが取り上げた定義に基づき考察を深めたい。

（１） キャリア教育と特別活動

まず、手引きで注目したいのは「キャリア発達」という言葉である。発達は質的变化を表す言葉であり、生涯にわたる変化の過程、すなわち、人が環境に適応していく過程である。当然のことながら、社会的・文化的な環境の影響という面も含まれており、環境やまわりの人間からの働きかけには、系統性や適時性を考えなければならない。発達課題と教育のあり方は密接につながっているのである。

手引きには、「キャリア発達とは、自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程である」とし、「キャリア発達の中心は、社会の一員として自立的に自己の人生を方向付けること」であり、キャリア教育は、「一人一人のキャリア発達を支援するものでなければならない」としている。

また、児童生徒が小学校から段階的に発達し、将来自立した社会人・職業人として生きていくために必要な能力として「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の四つの能力領域が挙げられている。これらは、学校教育の中で、1教科で達成できるものではなく、教育活動全体を通して取り組んでいくものである。その意味では、学校という集団教育の中で、特別活動の特質である「集団活動による社会性の育成」「体験学習による人間形成」「生き方を学び、生きる力を培う活動」と重なり合う。キャリア教育と特別活動領域とを密接に関連させながら、教育活動全体の中で、組織的、系統的に位置付けることが必要であるといえよう。

（２） 生きる力をはぐくむキャリア教育

社会の急激な変化に対して、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を

解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や、感動する心などの豊かな人間性など、すなわち「生きる力」の育成が求められている。

社会的自立・職業的自立に向けた教育として、キャリア教育は、児童生徒に生きることの尊さを実感させ、社会の一員としての自己の存在を理解させ、職業や勤労、学習や諸活動に積極的にかかわる意欲・態度を持つよう指導・援助するものである。すなわち、特別活動と同じく「生きる力」に直接かかわるものである。現行から改訂学習指導要領へと貫かれている基本理念「生きる力」の育成は、教育における不易といえる。

3 特色ある学校づくりの実践事例

ここでは、事例として、集団活動、体験学習、生き方をキーワードに実践した学校づくりについて、以前、纏めたものを引用する。

(1) 地域に開かれた学校

—魅力ある中学校文化の発信をめざして—

高岡西部中学校長 河田悦子

世の中の急激な変化に対応して、今、学校の在り方も根底から問われ、否応なしに変わらざるを得ない状況に立たされている。思春期という発達段階からも、取り巻く状況からも、中学校現場には、かなりの危機感がある。しかし、日々の多忙な教育活動の中でどう変わればいいのか、長期的な見通しを持ってないまま目の前の生徒の問題に対応している感も否めない。

だからこそ、日々の実践を通して教師自身が自らの資質を向上させることが重要である。それを支えるのは、校長が明確な方向を示し、苦労や喜びを共にし、信頼される存在となることであり、安心して働ける温かい職場の雰囲気をつくることであろう。

生徒は、わずか三年間の中学校生活を通して、自立の基礎、自ら学び、考える力や社会性を身に付け、心も体も大きく成長していく。一人一人の生徒は、私たちの希望である。私の好きな万葉の言葉に「花笑み」がある。蕾がほころび花びらが開く花笑みのように、やがて、美しい知恵の花を咲かせてほしい、また、教職員も含めて、明るい花笑みのあふれる学校を願っての経営の一端について述べたい。

①学校の特色の把握、文化的リーダーシップの発揮

まず、校長自身が学校の沿革と学校を取り巻く地域性を把握し、地域文化を熟知する。地域性とは、自然環境、地理的環境だけでなく、歴史、経済、文化に関するすべての環境である。本校は、小矢部川と千保川という二つの川の流域に位置し、背景に文化を運んだ川の歴史があり、往来する舟や橋のイメージが重なる。また、高岡開城と同時に造られた鋳物町や近代のアルミ工業の伝統があり、水と炎の育む文化の伝統がある。

地域の教育力は「ものづくり」の文化的風土の中で培われたものだが、その教育力の変化には危惧の念を抱かざるを得ない。このような現実を考えると、学校は地域と連携するとともに、地域の新たな創造に関わるという視点が大切なのではないか。「在る」ことに慣れて価値に鈍感になり、大人も

子どもも元気がなくなりかねないからである。

人の営みすべてを含む地域文化は、子どもの人間形成に大きな影響を与え、心のよりどころであるふるさと意識は、温かさという感情的要素があって初めて培われる。通学路の風景、掲示物一つをも含む校舎、心を込めた校歌、時間割も学校行事も、そして、生徒や教師の言語環境や人間関係など、生き方を学ぶ環境すべてが学校文化である。特色を生かすことが学校の魅力、機会をとらえて魅力を発信するのが校長の役目と、これまで培ったネットワークをフルに活用している。中学校の文化が生徒にとっても地域にとっても、誇りになるようにしたいと願っている。

②わかりやすく焦点化した学校運営方針

前年度12月に行った2度目の学校評価、授業評価をもとに、2月の評議員会の後、教員から次年度の行動計画について提言を求めた。全員が納得して意識的に取り組めるような基本計画を早めに提示するためである。

平成18年度学校運営の方針（ゴシックがキーワード）

朝の十分間読書を基盤に、わかる授業を実践し、自ら学ぶ意欲と関わる力を育てるために、創意を生かした学校運営に努める

◇わかる授業、楽しい学校

| | |
|---|------------------|
| 学 | 知的好奇心を喚起する授業の工夫 |
| び | 疑問関心を行動に移す学び方の工夫 |
| 方 | わかりやすい評価の工夫 |

| | |
|---|---------------------------|
| 意 | 基本的な生活習慣の確立 |
| | 学級集団づくり、自発的な生徒活動、元気な部活動 |
| 欲 | ボランティア活動の継続 生き方 指導 |

◇美しい環境づくりで行きたい学校に

- ・豊かな感性を培う環境づくり
- ・温かく安心できる人間関係、言語環境づくり

笑顔のあいさつ

◇信頼される見える学校を

・地域の教育力を生かし、西中文化を誇りとする教育（地域文化創造への貢献・ものづくりデザイン授業開始）

- ・連携の力で安全で安心な危機管理、情報管理
- ・外部評価の実施と公表

◇教師一人一人がリーダー、研修で資質向上を

・一人一人の持ち味を発揮する研修体制づくり、チームの総意、創意が生かされるのは責任と支え合い

- ・真摯に学ぶ姿勢、発見と感動の日々を

キーワードは、変える

③具体的な行動目標の設定

重点化、焦点化した学校運営方針に基づき、誰でもがそれぞれの立場で取り組めるように、わかりやすく具体的な実践目標として、行動計画（アクションプラン）を作成している。「朝の十分間読書」の集中に始まる学校生活三つの柱は「笑顔であいさつをしよう」「進んで学習しよう」「美しい環境をつくろう」。達成行動目標は「全員で朝の十分間読書に集中する」「自分から進んであいさつをする」「全員が雑巾がけをする」である。教職員、生徒、保護者の三者による中間評価と公表、改善、年度末評価と公表、これらは、家庭、地域の協力を得る力となり、そのことが一層の弾みにつながっている。

本年度は、アクションプラン図（A四判一枚）を4月のPTA総会で全保護者にも提示し意識化を図った。もうすでに、その効果が見受けられたのは、うれしいことである。

④フォーマル、インフォーマルな支援で、持ち味を生かし、人を生かす協働体制

チームの総意と創意を発揮するために必要なのは、ノウハウ以上にノウフー。教師の持ち味、特性を生かすためにはよく知ること。そこで、教師、生徒を対象に校長室で個人面接を行うことにした。ポイントは三つ。「自分の長所」「今年の課題、あるいは、打ち込んでいること」「西中をもっとよくするためには」である。一人一人の良さと変容に敏感でありたい。

意識改革は、部分的な事柄や対症療法的な操作で対応すればできるというものではなく、教育活動全体を対象に知恵を出し合うことができる状況を、どれだけつくるかにかかっている。そのためにも夢や希望を語り合える明るい雰囲気を感じたい。また、子どもも大人も、学習や行動にはモチベーションが大切であり、きっかけはたとえ必要に迫られてのものであっても、好奇心を刺激する多様な提示を図りたいと思っている。人を通しての情報は心に響く。自身が培ってきた人的ネットワークを大いに活用しながら、理念と実践の統合を旨としたい。

そして、水と緑、炎がはぐくんだ地域文化を継承し、美しい花笑みが育つように努めていきたいと思っている。
(全日本中学校長会報『中学校』2006. 6)

(2) 社会に学ぶ「14歳の挑戦」

さわやかな笑顔で開ける社会への扉—人、自然、社会とかがわる体験—

中田中学校長 河田悦子

4年目となった本校の「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業は、2学期が始まってすぐ、残暑厳しい9月6日から1週間実施されました。この事業は、

- ・次代を担う子どもたちを学校、家庭、地域が一体となって育てたい
- ・子どもたちが1週間学校を出て職場体験をすることにより、規範意識や社会性を高め、自分の生き方を考えさせる機会としたい

そんな願いと期待を込めて、平成11年度に始まり、今や全国から注目を浴びている富山県の素晴らしい体験学習事業です。

子どもをめぐる様々な問題が取りざたされていますが、その根底には人間関係の希薄さや生活における体験不足があります。本校では、全国ホテル研究大会を機に、環境教育で目指す力を、人とかが

わり、自然とかかわり、社会とかかわる力として、今年度は、特に、「笑顔であいさつする」「時を守る」「読書を楽しむ」の3つを行動目標にしています。さらに、学びが本物になるには、体験活動が不可欠です。幼少時からの生活体験、自然体験に加えて、中学校では、発達段階として社会体験が重要になってきます。だからこそ、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業は、大きな意味があり、事前学習、事後学習も含めて、生徒の自主的でより豊かな体験学習のまたとない機会といえましょう。

今年度は、地域や事業所の方々からなる推進委員会でのご意見を生かして、生徒は、夏休み中に手作り名刺を持って各事業所にあいさつに行きました。このことは、事業所や地域の方に知っていただくだけでなく、生徒の心構えを高めたように思います。

マナーの基本は、まずあいさつ。いい笑顔でさわやかなあいさつをし、仕事についたら集中力や根気、正確さや協調性が求められ、事前学習と実際とは大違いの厳しさに、自分を鍛えたようです。また、「表の仕事として目に見えなくても陰で支えている多くの人がいる」「一つ一つの作業にこんなにも気を遣うのか」と、物事の背後にある人の姿、心遣いに気づいた生徒もいました。事業所の方の温かいアドバイスを謙虚に受け止め、感謝し、その思いを行動に表し「14歳の挑戦」が終わってからも連絡を取っている生徒もいました。

5日間やり通すことが、社会への扉を開き、働くことの意味を考え、今、自分でできること、しなければならないことを行動に移していくという貴重な体験は、これからの学校生活や将来の進路を考える大きな力になることでしょう。

また、2年生の成長する姿を自分たちの経験と照らし合わせて見守る3年生、来年は自分たちの番と2年生の発表に耳を傾ける1年生の姿に、本校のよき伝統が受け継がれていくことを確信できるのもうれしいことです。

5日間、生徒は本当に貴重な体験をすることができました。この事業の実施にあたり、快く生徒を受け入れご指導くださった各事業所と指導ボランティアの方々、計画、準備の段階からご協力いただいた推進委員の方々、期間中、生徒を温かく見守り、励ましの言葉や率直なご意見を賜った保護者や地域の皆さまに、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

今後とも、本校の教育活動にご理解ご協力を賜りますようお願い申しあげ「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業のお礼と報告にさせていただきます。

(『「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」報告書 巻頭』2004. 12)

*なお、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業は、富山県の全公立中学2年生が、授業中に、1週間学校を離れ、地域の中で職場体験をすることにより、規範意識や社会性を高め、自分の生き方を考えさせる機会としたい、また、次代を担う子どもたちを学校、家庭、地域が一体となって育てたい、そんな願いと期待を込めて平成11年度に始まったものである。事業の詳細については、「職場体験ガイド」(文部科学省 平成17年11月)に掲載されている。

おわりに

文化は、歴史、経済、社会生活など人の営みすべてを含み、人間形成に大きな影響を与える。心の拠り所としてのふるさと意識は、郷土の自然、文化を生活の中で学ぶとともに、温かさという感情的要素があつてこそ培われる。地域の風物、通勤、通学路の風景、働き学ぶ場、地域行事

や伝統、人々の言語環境や人間関係など、生活のよって立つ環境すべてが文化といえる。自然環境や社会環境、人間関係を含め、すべての環境は、人間社会存立の基盤としての役割を担っているといえよう。

戦後60年余、社会は大きく変容し、21世紀に入り私たちは、急激な少子高齢化、高度情報化技術化、それらの結果として、人間関係が希薄化し、地域の共同活動や行事が衰退するなどの子どもたちに直接関わる地域の変化という様々の課題に直面している。しかも、変動する国際社会や地球規模の環境の問題は、家族の問題に直結しかねない状況にある。

人は、学びによって先人の知恵や文化を身に付け、新しい考え方や行動、未来につながる文化を創造していく。技と知恵、志を伝える教育という分野、中でも特別活動という領域に、「生きる力」の育成は、地下水脈のように脈々と流れている。私たち大人は、時間的タテ軸と空間的ヨコ軸という視点を持ち、教育という未来に続く仕事の役割を再認識したいものである。